

第一部 「「グローバル化と公共性」研究会のこれまで」序文

Foreword to “the Progress of Research Project on “Globalizaiton and Publicness” ”

加藤 雅俊*

第一部 「「グローバル化と公共性」研究会のこれまで」は、本研究会の到達点と課題を検討した座談会の成果と、本研究会を牽引してきた研究者による論文から構成されている。

「グローバル化と公共性」研究会は、巻頭企画で触れているように、2005年に活動を始めているが、その母体となった研究会まで遡れば、1990年代に活動を始めていたことになる。この長い期間のなかで、研究会の構成員は大きく変わり、また中心的なメンバーの高齢化も進んでいる。私のように最近になって参加した研究者は、本研究会がどのような問題意識のもとに、どのような活動を進めてきたのかを十分に理解・共有できずにおり、このことは本研究会の継承と発展を考える上で大きな課題となっていた。そこで、現行の重点プロジェクトが最終年度を迎えるこのタイミングで、これまでの本研究会の活動を振り返り、その到達点と課題に関する総括を行い、記録として残しておくことが重要と考え、座談会を企画した。巻頭企画の「「グローバル化と公共性」研究会の歩み－到達点、課題、そして発展可能性－」はその成果である。この巻頭企画では、本研究会の経緯や展開と成果だけでなく、現在直面する課題についても率直に言及されている。この巻頭企画によって、本研究会の学術的意義と社会的貢献があらためて認識され、今後の継承

* 立命館大学産業社会学部准教授

とさらなる発展へとつながっていくことを期待している。

続く各論文は、これまで本研究会を牽引してきた中心的なメンバーの最新の研究成果である。中谷論文は、「関係論的アプローチ」という視座から国家を分析する際に重要となる視点や概念を整理したものであり、現代社会における政治秩序のあり方を、「国家」という概念に注目して分析してきた著者の集大成といえるものである。ここで示された視点や概念は、「国家」の分析に限らず、その他の社会現象の分析にも応用できることに加え、「科学性」を追求し表層的な分析に陥りがちな現代の社会諸科学に対して、「関係論的アプローチ」は、別の科学的分析のあり方を示唆するものでもあるため、中谷論文は学術的にも社会的にも有益である。松下論文は、移民問題に注目して、「国家－社会」関係の変容を検討するものである。ここでは、警察国家化や分断化といった現象に注目して、現代社会において「国家－社会」関係が大きく変容していることが示されている。松下論文は、先進諸国の分析のみでは見落としてしまう重要な傾向を捉えるだけでなく、それを批判的に考察し、より良い社会の実現に向けた示唆をも提供するものであり、中谷論文同様に、学術的・社会的に大きな意義を有している。ラテンアメリカ諸国における政治・社会の分析を通じて、現代政治のあり方を批判的に探求し続けてきた著者の「研究者としての特色」がよく示されている。最後に、加藤論文は、「福祉国家の持続可能性」について、政治学の立場から批判的に検討したものである。「福祉国家の将来」に関しては、これまで多くの議論が展開されてきたが、最近では福祉国家の適応力の高さが指摘されることが多い。これらの議論は、福祉国家が今後も持続していくことを示唆している。それに対して、加藤論文は、福祉国家が果たしてきた社会的機能に注目して、福祉国家がその存続を脅かす二つの課題（環境と経済の両立可能性と、代議制民主主義の機能不全）に直面していることを指摘し、それへの対応が重要となることを示唆している。

巻頭企画およびここに所収の論文が示すように、本研究会は、学際的・多

角的な観点から、現代社会の諸特徴を批判的に分析し、より良い社会のあり方とその実現に向けた道すじを検討する点に特徴がある。専門分化が進む現代の社会諸科学の基準からすれば、科学的な精緻さは低いと言わざるを得ないであろう。しかし、ここには、現代の社会諸科学が失いつつある「未来志向の批判的な社会分析」という特色がある。学問の社会的意味が問い直される現在において、本研究会が発信してきた研究成果や研究のあり方は、学術的にも社会的にも意義のあるものだと信じている。本研究会の活動が今後も発展していくことを期待している。

